大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

山口義久先生略歴・研究業績一覧, 贈る言葉

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2015-03-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/14342

山口義久教授 略歴

昭和 24 年 4 月	青森県南津軽郡尾上町（現平川市）新屋町に生まれる。
昭和 31 年 4 月	尾上町立金田小学校入学
昭和 36 年 4 月	弘前大学附属小学校に転入学（昭和 37 年 3 月卒業）
昭和 37 年 4 月	弘前大学附属弘前中学校入学（昭和 40 年 3 月卒業）
昭和 40 年 4 月	青森県立弘前高等学校入学（昭和 44 年 3 月卒業）
昭和 44 年 4 月	京都大学文学部入学（昭和 48 年 3 月卒業）
昭和 48 年 4 月	京都大学大学院文学研究科修士課程入学（昭和 50 年 3 月修了）
昭和 50 年 4 月	同大学院同研究科博士課程進学（昭和 53 年 3 月単位取得退学）
昭和 53 年 5 月	大阪府立大学総合科学部助手（昭和 55 年 2 月まで）
昭和 55 年 3 月	大阪府立大学総合科学部講師（昭和 61 年 3 月まで）
昭和 61 年 4 月	大阪府立大学総合科学部助教授（平成 9 年 3 月まで）
平成 3 年 7 月	英国ケンブリッジ大学客員研究員（平成 4 年 9 月まで）
平成 9 年 4 月	大阪府立大学総合科学部教授（平成 17 年 3 月まで）
平成 11 年 7 月	英国ケンブリッジ大学客員研究員（平成 12 年 7 月まで）
平成 17 年 4 月	大阪府立大学総合教育研究機構教授（平成 23 年 3 月まで）
平成 18 年 4 月	大阪府立大学総合教育研究機構統括（平成 21 年 3 月まで）
平成 21 年 4 月	大阪府立大学総合教育研究機構長（平成 23 年 3 月まで）
平成 23 年 4 月	大阪府立大学高等教育推進機構教授（現在に至る）
平成 23 年 4 月	大阪府立大学高等教育推進機構副機構長（現在に至る）

研究業績一覧

〈著書〉

1. 自然観の展開と形而上学—西洋古代より現代まで— (1988) 紀伊國屋書店、共著（井上・小林編）「デモクリトスとアリストテレス」31—55 頁担当。
2. 真理への思慕—大学生のための哲学史— (1989) 理想社、共著（隈元忠敬編）「実在とロゴス」11—57 頁（ギリ シア哲学の展開 / プラトン）担当。
3. 西洋哲学史〔古代・中世編〕(1996) ミネルヴァ書房、共著（内山・中川編）「新プラトン主義と古代哲学の終焉」135—54 頁担当。

4. ネオプラトニカ—新プラトン主義の影響史 (1998) 昭和堂、共著 (新プラトン主義協会編)「プロティノスにおけるストア的概念 —ロゴス概念を軸として—」64-87 頁担当。
5. 哲学を読む—考える愉しみのために— (2000) 人文書院、共著 (大浦・小林・富永編) 20—35 頁担当。
6. ネオプラトニカ II—新プラトン主義の原型と水脈 (2000) 昭和堂、共著 (新プラトン主義協会編)「プロティノス・コロキウム—『エネアデス』 V 2を めぐって—」307-21 頁担当。
7. アリストテレス入門 (2001) 筑摩書房 単著 (ちくま新書 301)、全 222 頁。
8. イリソスのほとり—藤澤令夫先生献呈論文集(2005) 世界思想社、共著(内山勝利編)「プロティノスのプラトン主義—観想と実践をめぐって—」536-549 頁担当。
9. 哲学の歴史 第2巻／帝国と賢者【古代II】(2007) 中央公論新社、共著(内山勝利編)「IX. プロティノスと新プラトン主義」(501-568 頁) 担当。
10. プロティノス／エネアデス (抄) (2007) 中央公論新社、共著 (翻訳者：田中美知太郎ほか2名) 解説「プロティノスと現代」(1-19 頁) 担当。
11. 新プラトン主義を学ぶ人のために (2014) 世界思想社、共著 (水地宗明・山口義久・堀江聡編)「知性原理」の章 (78-93 頁) と「あとがき」担当。
12. プラトンを学ぶ人のために (2014) 世界思想社、共著 (内山勝利編) II、第1章「書かれたものと書かれざるもの」(24-39 頁) 担当。

〈訳書〉

1. J. L. アクリル『哲学者アリストテレス』(1985) 紀伊國屋書店、共訳 (藤沢令夫と) 全 350 頁。
2. G.E.R. ロイド『初期ギリシア科学—タレスからアリストテレスまで—』(1994)、法政大学出版局。共訳 (山野耕治と)。
3. 『ソクラテス以前哲学者断片集・第I分冊』(1996) 岩波書店、共訳 (内山勝利編) 38—70 頁担当。
4. 『ソクラテス以前哲学者断片集・第V分冊』(1997) 岩波書店、共訳 (内山勝利編) 239—54 頁担当。
5. G.E.R. ロイド『後期ギリシア科学—アリストテレス以後』(2000)、法政大学出版局。共訳 (山野耕治・金山弥平と)。第 3-5, 8 章担当。

6. クリュシッポス『初期ストア派断片集２』(2002)、京都大学学術出版会。共訳（水落健治と）。8-37、430-584 頁担当。
7. クリュシッポス『初期ストア派断片集３』(2002)、京都大学学術出版会。単訳、全 486 頁
8. クリュシッポス『初期ストア派断片集４』(2005)、京都大学学術出版会。共訳（中川純男と）。110-188、229-314、365-378 頁担当。
9. クリュシッポス『初期ストア派断片集５』(2005)、京都大学学術出版会。共訳（中川純男と）。6-66、164-232、300-314、319-324 頁担当。
10. アリストテレス全集 第三巻 (2014)、京都大学学術出版会。共訳（納富信留と）。『トポス論』(1-356 頁）とその解説（479-502 頁）担当。

〈論文〉

1. ソクラテスの夢とイデア—『テアイテトス』201D—206B の解釈—、『古代哲学研究』VIII (1976) 1—9。
2. プラトンのφύσιςについての覚え書—対象としてのφύσιςを中心にして—、『古代哲学研究』 X (1978) 1—10 頁（古代哲学会編）
3. プロティノス哲学における「可能」と「現実」—『エンネアデス』II 5—、『大阪府立大学紀要（人文・社会科学）』第 27 巻 (1979) pp.19 ～ 33
4. アリストテレスにおけるＥＮＥＰＧＥＩＡとＫＩＮＨＳＩＳの区別—ἐνέργειαの多様な意味の間におけるその位置づけ—、『古代哲学研究』 XI(1979) pp.19—33
5. プロティノスの感覚論、『西洋哲学史研究』 1(1980) pp.23 ～ 32（京都西洋哲学史研究会編）
6. アリストテレスの質料に関する一考察—「構成因」と「基体」—、『西洋古典学研究』XXXI(1983) pp.32 ～ 42（日本西洋古典学会編・岩波書店刊）
7. アリストテレスにおける質料と可能性、『大阪府立大学紀要（人文・社会科学）』第 31 巻 (1983) pp.25 ～ 38
8. プロティノスにおけるイデアと知性、『人文学論集』第３集 (1985) pp.33 ～ 49（大阪府立大学人文学会編）
9. 内在と超越をめぐって—アリストテレス・プロテ ィノスとイデア論—、『理想』第 636 号 (1987) pp.38 ～ 48（理想社刊）
10. ストア派宇宙論の二つの原理、『人文学論集』第６集 (1988) pp.49 ～ 60

11. 懐疑主義のパラドクス、『人文学論集』第7集 (1989) pp.35 ～ 52
12. ソクラテスと産婆術、『人文学論集』第9・10集 (1991) pp.59 ～ 75
13. ストア派論理学の歴史的意義について、『文化学研究集録』第4集 (1994) pp.13 ～ 25（大阪府大総合科学研究科）
14. 初期ストア派の生命論、『人文学論集』第13集 (1995) pp.17 ～ 32
15. インドとギリシアの古代「原子論」—比較思想の基本的問題—、『人文学論集』第14集 (1996) pp.99 ～ 117
16. 眼に見える形、見えない形—アリストテレスにおける生物と形相の一断面—、『形の文化誌』第3巻 (1996) pp.82 ～ 89（形の文化会編・工作舎刊）
17. カルネアデスの懐疑主義、『人文学論集』第15集 (1997) pp.31 ～ 45
18. プロティノスのプラトン主義—観想と実践をめぐって—『西洋哲学史における新プラトン主義の影響作用史の研究—古代から近世に至るまで—』(1997) pp.20 ～ 26
19. パイディアーとパイデイアー—遊びと教育・学習をめぐって—、『形の文化誌』第5巻 (1998) pp.50 ～ 57（形の文化会編・工作舎刊）
20. 懐疑の哲学的意義、『アルケー』2002 (2002) pp.16 ～ 28（関西哲学会編・京都大学学術出版会刊）
21. ギリシア哲学と笑い、『形の文化誌』第10巻 (2004) pp.112 ～ 121（形の文化会編・工作舎刊）
22. プロティノスにおける心身合一体と魂の関係について—ＩＩ『生きものとは何か、人間とは何か』を中心に—、『新プラトン主義研究』第4号 (2004) pp.69 ～ 80（新プラトン主義協会編）
23. 古代ギリシアから進化する「笑い」の哲学、『人間会議』2005夏号 (2005) pp.72-76（宣伝会議刊）
24. 『パイドロス』で「書かれた言葉」と対比されているもの—プラトンにとって書くことの意味—、古代哲学研究 39（2007）pp.1-15
25. ストア派とプロティノスにおけるアパテイア—内面の自由をめぐって—、『新プラトン主義研究』第9号 (2009) pp.27-34（新プラトン主義協会編）
24. ストア哲学は禁欲主義か、『ギリシャ哲学セミナー論集』第7号 (2011) pp.16-24（ギリシャ哲学セミナー編）

贈る言葉

山口先生の思い出

中　村　　治

山口先生とおつきあいさせていただいた人ならだれでも、そのだじゃれに悶絶した経験を持っているだろう。お酒が入ると、だじゃれが特によく出てきて、まわりにいる者は、酔いが一気にまわってしまうのである。だじゃれの能力は、小さい頃から古典落語に親しんだことによって育まれたとおっしゃるが、言語というのか、ことばに対する特別な才能をお持ちなのではないかと思う。山口先生は、大学1回生の時、教養部の必修科目としてドイツ語、中国語を学ばれただけでなく、2回生になると、ギリシア語、ラテン語も学ばれるようになり、さらにフランス語も自習されたという。しかもそのラテン語というのは、水野有庸先生の週10時間コースのことである。山口先生の4年後のことではあるが、水野有庸先生のラテン語週10時間コースに出て、それだけでフラフラになっていたわたしには、信じがたいことであった。

わたしは、修士課程に入る前に少しだけギリシア語をかじり、修士課程に入ってから、藤沢令夫先生の演習（プラトンの『ティーマイオス』）に出席させていただいたのであるが、その年、山口先生は大阪府立大学総合科学部の助手になられたので、藤沢先生の授業で山口先生とごいっしょさせていただいたということはない。何かのおりに藤沢先生の授業に山口先生が顔を出されることはあっても、山口先生は、師範代のような扱いを受けておられ、わたしには雲の上の存在であった。

そんなわたしが山口先生と接点を持ったのは、神戸大学の井上庄七先生、大阪市大の小林道夫先生、京都大学の助手をされた宗像恵先生、伊藤邦武先生らが中心となって活動された「17世紀哲学研究会」においてであった。山口先生、伊藤先生、宗像先生は、いずれも東京大学志望であったと聞くが、昭和44年（1969）にはその入学試験がなかったため、京都大学に入られ、つきあっておられた。山口先生が「17世紀哲学研究会」に参加されるようになったのは、その関係によってであると聞いている。他方、わたしが「17世紀哲学研究会」に参加させてもらうようになったのは、井上先生、小林先生、宗像先生、伊藤先生の授業に出席させてもらっていたということもあるが、井上先生のドライブにつきあうことが多かったからであろう。井上先生は、60歳近くなってから運転免許を取得され、自分が思うところに行けるようになったのがうれしくて、あちこちへドライブに出かけられたのだが、奥さま以外にそのドライブにつきあう者がなかなか見つからなかった。他方、わたしは小さい頃から見知らぬ

土地へ行くのが大好きであった。そのため、わたしは、井上先生の車に乗せてもらい、車がなければ行きにくいところへ、あちこち連れてもらったのである。

それはともかくも、そんな関係でわたしは山口先生と同じく「17 世紀哲学研究会」に参加させてもらっていたところ、昭和 60 年、山口先生が「大阪府大で公募がありますが、応募しませんか」とおっしゃってくださったのである。わたしは当時、博士課程を出て 3 年目。博士課程を出て 2 年目になって、ようやく少しだけ非常勤講師の職を得たのだけれど、ほとんど収入がない状態であった。それにもかかわらず、妻に食べさせてもらうつもりをして、結婚。ところが妻は、結婚退職させられてしまった。そして子どもができたのである。「子どもができたのはうれしいけど、これからどうしよう」と思っていたところであったので、喜んで応募させてもらった。そして山野先生、山口先生の御尽力で、昭和 61 年（1986）9 月、なんとか大阪府大の助手にしてもらい、それから数年間、山口先生の研究室に机を置かせてもらったのであった。山口先生、そして山野先生は、おしつけがましいところがなく、学生気分の抜けきらない、世間知らずのわたしがへまをすると、そっと助けてくださるのであった。

大阪府大に就職させてもらったその昭和 61 年の 11 月、中世哲学会に参加して、東京から戻ってきたら、「山口先生のお父さまが亡くなられたので、弘前へ行ってくれ」と山野先生に言われた。わたしは、すぐに準備して、翌朝、日本海経由で弘前へ向かった。

山口先生の家は、弘前から弘南鉄道に乗り換えて、黒石に行く途中の尾上町にあった。尾上町は、わたしが生まれ育ち、今も住んでいる京都の岩倉と似たような田園風景が広がったところであった。

わたしは、山口先生のお父さまに会わせていただいたことはない。山口先生が夜行列車でお父さまに東京へ連れてもらわれたというような話はうかがったことがあったが、お父さまのお写真を拝見したのは、その時が初めてであった。仙人のような方だと思った。第二次世界大戦後、シベリアに抑留され、ずいぶんひどい扱いを受け、それがもとで健康を損なわれたと聞いている。お母さまと二人のお兄さまは、やさしい、すばらしい方であった。近所の人や親戚の人と話をしていたとき、だれかが「三人とも自慢の息子です」とおっしゃっていたが、その通りだと思った。

地元の人は、わたしと話す時には、わたしにわかるように話してくださるが、地元の人どうしで、そして山口先生と話をされるときは、津軽弁で話をされるので、わたしには別世界のようであった。わたしは、わたしがそれまで知らなかった山口先生の側面を見たような気がした。

京都〜弘前間の車窓風景は美しい。とりわけ津軽は美しい。しかし遠い。そんな遠い津軽の弘前から、京都、そして大阪へ来てくださっていることの有難さを、身に染みて感じた。

山口先生御退職によせて

1982 年総合科学部卒　　大　島　庶　幾

山口先生、永年にわたる勤務、お疲れ様でした。そして御指導ありがとうございました。私は 1978 年、大阪府立大学総合科学部第一期生として入学しました。山口先生は、その時すでに西洋文化講座の教官としておられたと思うのですが、私自身は物質科学コースに進む予定でしたので、直接お話しする機会はありませんでした。

産業革命以降、科学の進歩はめざましく、人間の生活はどんどん便利になってきました。とりわけ、第二次大戦後、石炭、石油、原子力など、大量のエネルギー生産・消費を後ろ盾として、急速に経済、社会が進歩したと思います。物質を構成するミクロの世界がみえるようになったし、遠く離れた惑星に探査機をとばすことができるようにもなりました。生命科学の分野では、ヒトをはじめとした生命体のゲノムの解読が短い時間で可能となりました。遺伝子解析の技術は、ips 細胞をついに生み出し、臓器移植にかわる、画期的な治療を可能にしようとしています。

しかし、一歩立ち止まって考えてみると、はたして人間は幸福になってきたのでしょうか？徹底した西洋的な合理主義の追求の陰で、人間の本質が軽視されているのではないか？あるいは顧みられなくなっているのではないか？そんな疑問が湧いてきて、西洋文明の源流である、ギリシア、ローマの文化に目が向き始め、考えるヒントがあるのではないかと考えるようになりました。

そのためには古典ギリシア語の理解が不可欠であると考え、古典ギリシア語の講義を聴講申し込みしました。それが山口先生とお出会いするきっかけです。

ギリシア語Ⅰの講義は受けていなかったので、田中美知太郎先生の『ギリシア語入門』という text を勉強しはじめました。本の中にある和訳の添削を山口先生が、ご多忙のなか、快く引き受けてくださいました。いま思うと、チンプンカンプンな和訳で、ノートは赤字だらけ、さぞかし苦笑いされながら添削を加えていただいていたことと思います。

ギリシア語Ⅱは、山口先生の御指導で 3 期生のⅠ君とともにプラトンの『ラケス』を講読しました。私にとって、プラトンの原書を読むのはあまりにも難しく、1 ページを予習するのに数時間かかるありさまでした。もちろん、岩波書店の『プラトン全集』を大いに参考に（虎の巻）にしていました。山口先生はそんなことは、当然お見通しでしたが。

先生は、才知にあふれ、温厚なお人柄で、字も美しく、いつも尊敬の念をいだいていました。それは、すべての学生が感じていることだと思います。しばしば、ウイットに富んだジョー

クを連発して雰囲気をなごませていただきました。私の卒業後にはイギリスに留学され、なかなかお会いする機会がなかったのですが、私の恩師、山野先生を慰労する節目の会や、近年は年一回お出会いする機会があり、昔と変わらない気鋭さに感心させられています。

退職後はしばらく休養されて、事情がゆるせば、今後とも後進の指導にあたっていただきたいと思います。本当にありがとうございました。

山口先生に学ばせていただいたこと

1986 年修士課程修了　**伊　藤　敏　之**

山口先生、長い間本当にお疲れ様でした。私が大阪府立大学総合科学部に入学したのは、1980 年の 4 月でした。以来数えてみますと 35 年近い年月が経過したことになります。この間公私ともに山口先生には大変お世話になり本当にありがとうございました。今回一つの節目として大阪府立大学を「ご卒業」されるわけですが、先生の研究者・教育者としてのご活躍は終わるわけではなく、今後もさらなるご活躍をされることと思います。

振り返ってみますと、山口先生に初めてお会いさせていただいたのは、一回生のときのギリシア語初歩でした。大学に入ったばかりの私がなぜギリシア語の授業を受けようと思ったのか、今となっては思い出しようもありませんが、この時の選択が現在の私を形づくる大きな選択であったことは間違いありません。ギリシア語の勉強は、最初は楽しかったのですが、進むにつれて大変で何度かやめてしまおうかと思ったこともありましたが、どうにか続けられたのも山口先生のおかげでした。その後山口先生には、修士課程修了までラテン語も含めて初歩から原書購読は当然のこととして、多くのことを教えていただきました。

当時の思い出として印象に残っているのは、当時の西洋文化コースの教員・学生で奈良へ旅行に行ったことです。宿泊は會津八一、和辻哲郎や平山郁夫をはじめ数多くの文化人が利用したことで著名な「日吉館」に泊まらせていただきました。もちろん高名な「おばちゃん」こと田村きよのさんともほんの少しでしたがお話をさせていただくこともできました。もちろん夕食は、これまた有名な「すき焼き」をいただいたのですが、そのあとが大変でした。少し記憶が曖昧ではあるのですが、日吉館はたぶん飲酒が禁止か制限されていたにもかかわらず、夜に塀を乗り越えてお酒を買いに行き、部屋で隠れて酒盛りをしたのですが、翌日になって従業員の方に見つかりこっぴどく怒られて、今後出入禁止とまで言われたような記憶があります。それでも女将のきよのさんの優しい眼差しが今でも忘れられません。

さて、修士課程修了後、私は古代哲学とは全く関係ない普通のサラリーマン人生を送ることとなり、現在は大型プレス機械を製造する会社で管理部門全般を管掌する立場で仕事をしています。昨今の事業会社を取り巻く環境は非常に早いスピードで変化しており、特に効率的な経営と企業価値向上（海外からの直接投資を呼び込むため）を意図した企業統治体制の検討が急ピッチで進められており、経済産業省と金融庁を中心として数多くの検討会が開催されています。これらの検討会の前提ともなるべき改正会社法が昨年に公布され、この５月から施行が予定されています。今回の改正の一つの大きなポイントが上場会社に対する実質的な社外取締役の義務付けにあります。私が現在勤めている会社でも、この社外取締役候補者をどうするのか、いろいろと大変でした。

ところで企業経営や企業統治ということを考えてみますと、実は国家の統治（あるいは数年前の欧州での国家財政の破たん騒ぎを思い起こしますと「経営」といった方が正しいのかもしれません）とほぼ同じようなものであり、プラトンの「国家」や「法律」とも相通ずるものがあるようにも思われます。国家にとっての国民は、企業では従業員であり、防衛は競争力の強化と考えても的外れではないかと思います。

このように考えてみると全く関連性がないと思われている哲学と企業経営も、同一の考え方で対応できることになるのかもしれません。異色の経営者であったのかもしれませんが、東芝の社長・会長を歴任された西田厚聰氏は、東京大学大学院で西洋政治思想史（フッサールやフィヒテ）を学ばれ、博士課程修了後、東芝のイラン現地子会社を経て、東芝のパソコン事業の基礎を築かれることになります。自分のことを振り返ってみても、大学時代に学んだ古代ギリシア哲学が、今の仕事、特に仕事の筋目を考えるという点では、大いに役立っているように感じています。

山口先生にとってみれば、字義どおりの不肖の弟子の私ではありますが、現在の私があるのも山口先生のおかげであり、深く感謝しています。何か取りとめのない雑文となってしまいましたが、山口先生の今後の益々のご活躍を祈念いたしまして終わりたいと思います。

颯爽とした青年学者

1989 年修士課程修了　**北　口　裕　史**

大学のカリキュラム表には西洋古典語の担当教官として山口先生のお名前が載っていた。時間割を自分で作るという作業は、入学したての学生にとっては新鮮な体験である。ドイツ

語やフランス語だって珍しいのに、西洋古典語もあるとはどういうことだろう。さすがに大学だと思った。

自分の卒業研究のことなど何も考えていなかった入学早々の私は、もちろんこのような趣味的とも思えるような語学はとらなかった。きっと老教授の教える暗号解読作業のようなものではないかと思った。

ところがその年の後期になってから、この「趣味的」語学がたいへん身近になってしまった。ギリシア哲学を学ぶためには、この語学の習得は必修だと山野先生に脅かされたからだ。この「必修」語学を教えてくれる山口先生とはどういう人かと思った、きっと山野先生のようにおっかない人に違いない。

ギリシア語をとっていた学生に連れられ、そのうしろに隠れるようにして山口先生の研究室を訪れたのは真夏のことだった。そのとき、先生はご不在で、私たちは研究室のドアの前で待っていた。やがて、やや遠くからこちらに笑いかけてくださっている若い颯爽とした青年が目に入った。半袖の涼しそうなシャツに焦げ茶の渋いネクタイをされていた。私が想像していた「おっかない老教授」がこの人だと知ったとき、ひっくり返るほど驚いた。

山口先生は私より十三歳年上だから、当時は三十過ぎだった。年齢より若く見える先生にやさしい「お兄さん」という印象を持ってしまった。たちまち嬉しくなって、「前期の分も頑張りますから、後期の授業からぜひとも参加させてください」ととんでもないことを口走っていた。私を熱心な学生と勘違いされたのか、好きにしろということだったのか、一応許可が出て、一回生の後期から山口先生のギリシア語の授業に出ることになった。

初めての語学を、しかも途中から学ぶということはいかにも暴挙だった。その年には当然挫折し、翌二回生のときも単位が取れず、ようやく履修できたのは三回生のときだった。それゆえ、山口先生にはギリシア語初歩だけで二年半もご指導いただいたことになる。本当にコイツはやる気があるのかと先生は思われたことだろう。山口先生だからこそ、私は曲がりなりにもこの難解な言語の初歩を了えることができ、ギリシア哲学への道を拓いていただいたのだった。

しかし、少しばかり弁解すると、テキストだった田中美知太郎先生の本は、多色刷りの華やかな教材で受験勉強をしてきた身には、かなりとっつきにくいものだった。しかも、和訳と作文しかない演習問題に、正答例はいっさい掲載されていない。自学自習はさらに厳しい。

余談ながら、私は今たまたま学習図書教材を作ることを仕事にしている。教材は誌面レイアウトが命で、いかにカラフルな誌面にするかに苦心する。活字もいろんなフォントを駆使し、学習の効率化を謳って誌面あたりの情報量も少なくする。もしかすると、私の仕事は子どもたちの学力を低下させることに寄与しているのかもしれない。

そんな中にあって、山口先生に教えていただいたギリシア語のテキストは今でも懐かしい。

わずか数人の授業で、まるで手を取って導いてくださるようだった。こんな贅沢な体験は生涯に二度とないだろう。大学というところはいいところだと思った。勉強しようとさえ思えば、いくらでも教えてくれる先生方がいた。その筆頭が私にとっては山口先生だった。

山口先生の初めての本が出たのは私が四回生のことだ。けっこう大部な翻訳書で『哲学者アリストテレス』というタイトルだった。この本に先生のサインをいただいて、丸善で原著も購入した。もし、それを原著と照らし合わせて読むほどの熱心さが私にあれば、どれほど素晴らしかったことだろう。しかし、私は山口先生の本というだけで満足だった。そのころ、まだアリストテレスの入門書はそれほどなかったと思う。必読文献だと思った。この本を演習で使用してくださったらいいのにとも思った。

ずっと後年になってから、今度は山口先生の単著として『アリストテレス入門』という本が出る。これはじつに読みやすい画期的な本だった。いまだにアリストテレスに関する私の認識は、ほとんど山口先生に負っている。それだけでも、全く未知な人にアリストテレスを解説するときには絶大な威力を発揮した。

大学院生になったとき、「存在論特論」という講義があり、これまでの白井成道先生に代わり山口先生が担当された。白井先生の講義はひたすらハイデガーに関するものであったが、山口先生の講義の中心はアリストテレスの実体論だった。私にはこの方がはるかに興味深かった。

毎回、何ページにもわたってノートをとった。そのノートをさらに清書した。これでアリストテレスについていいレポートが書ける。同時にアリストテレスについて勉強もできる。いや、今こそアリストテレスをしっかり読めという神さまの声だと思った。

しかし、その神さまの声に、怠惰であった私はとうとう従うことができなかった。にわか勉強をするにはアリストテレスはあまりにも巨大だった。現在刊行中の『新版アリストテレス全集』の発刊を知ったとき、そこに山口先生のお名前を見出して、歓びに心が満たされた。岩波書店は半世紀ぶりの新訳だと宣伝していた。新しい文化が生まれるのだと思った。

終わりなき山口先生への思い出

1990 年修士課程修了　**倉　橋　弘　美**

私が山梨の、当時は最寄駅が無人駅、というド田舎の大学から大阪府大に来た時（世間の多くでは大阪府大は田舎扱いされているが、私の出身大学からいくと、かなりな都会なのであった）、破天荒な山野耕治先生とともにビックリしたのが山口先生の存在であった。

山口先生というと、非常に温和な印象があるが、合同での自己紹介の時に「私の趣味はギターを弾くことです」と言うと、「どのようなコンクールで優勝された経験があるのですか」とその時もやはりいつものようにニコニコしながら質問を投げかけられた。私はその時始めて「これはエラいところにやってきたぞ。趣味も油断して話してはいけないのか」ということに気づき、残りの2年間を、山野先生と山口先生とともにお世話になった金子務先生に修論を渡した際、「キミは日本語を知らないと思っていたよ」と言わしめるほどの寡黙な存在に終始する決意を持ったのであった（卒業後の同窓会で先輩から、「よく喋るようになりましたねえ」と言われたが、実はこの府大時代の2年間だけが、山口先生のおかげで物静かだっただけなのである）。

そんな山口先生だから、研究分野に関しては、度肝を抜かれる言葉をいわれるのがしばしばであった。一番強烈だったのは、「我々は、アリストテレスよりもプラトンを理解している」という言葉であった。「そんなわけないやろ」と心の中でつっこみながらも、「学者というのはこういう自負をもつものなのか、すごいなあ」というのがあった（山口先生というと、当時はアリストテレスの先生、というイメージがあったが、実は山口先生、ひいてはどの先生だってみんな（？）、アリストテレスよりプラトンが好きなんだ、という話を後日先輩から聞いたことがある）。

山口先生の偉大さを痛感しつつも、2年という月日はあっという間に過ぎ去った。私は名残惜しくもたった2年で府大を後にし、その後、ただ日々を暮らすだけの真っ暗な余生を送ることを余儀なくされると思っていたのだが、最初の転機は府大の一期生で、山野先生から「ヒポクラテスを原文で読んだことのある唯一の医者では」と噂だけはよく聞いていた伝説の人・大島さんのお声で卒業生が一同に集まる機会を持てたことだ。

それは毎年メンバーに若干差はあるものの、山野先生と山口先生の頭文字が入った「ワイワイ会」という名前で結成され（「ああ、もし中村先生が山田という名前だったら、ワイワイワイ会になるのになあ」と密かに思いつつも）、幸運にも1回で終わることなく、毎年恒例の行事になる、楽しい楽しい同窓会となった。

そこで再会した（私には、暗黒時代の数年間があり、過労死しそうなくらい働いていた時期にプライベートな記憶が殆どないので、もし間違っていたら、山口先生、すみません）山口先生は、学生時代、メトドス（古代哲学会）で同級生と私を引率しながらも、到着した途端、右も左もわからない私達をほったらかして楽しそうに京大の先生方と交わる山口先生を恨めしげに見ながら「山野先生は怖いけど温かい。山口先生は優しいけど冷たいわよね」と陰口をたたいていた時代を恨むくらい、温情のある先生として登場されたのであった。

その評価の転機はワイワイ会以外で何であったのかは今となってはわからないが、私自身が起業してしまったのを見かねた山口先生は、私に「形の文化会」の事務局のお手伝いを、

と言ってくださり、それから年に２～３回の「形の文化会」そのものや、その前後の打ち合わせでお会いする機会が増え、「形の文化会」の懇親会では、「私は山口先生の大昔の弟子です」と公言しながら歩む人生となってしまった。また、会社以外に NPO 法人を設立した際にも、大変お世話になった。

そんな出来の悪い弟子にとって、学生時代は研究者としての偉大な姿しかわかっていなかった山口先生が、卒業してからは、マネジメント能力をバリバリ発揮されている姿がぼんやりとわかってきだしたので、逆に、ちょっとずるいと思ったこともある。せめて山口先生がオンチだったらいいのになあ…と思ったりしたが、なんと、カラオケも先生の大得意で、故郷の青森の歌を中心に熱唱され、最近ひょんなことでお会いした娘婿さん曰く「本業より力を入れているようです…」という青森県県人会京都支部会長としての君臨ぶりもすさまじい。まあ、音楽が大好きな山口先生がオンチなわけがないかな、とかも思うのであるが。

今のところ、今後の活動をどうされるか、まったく教えてくれないのでやきもきしているが、何もかもすごい山口先生、今ほどの激務でない道を選ばれたとしても、またもや激務になるほど活躍されていくのだろうなあ…早く次の道を教えてほしいなあ…とじりじりしながら、まだまだ終わりなき山口先生への思い出は続いていることを予見し、楽しみにするのであった。

ギリシア哲学研究へのロギスティコンの導き

1994 年修士課程修了　　**木　原　志　乃**

哲学を論じるさいの透徹的な思考の鋭敏さ、西洋から東洋、古代から現代まで、宇宙論であれ認識論および倫理学であれ、どのような問題にも対処しうる安定感――先生に長くご指導いただく中で、私の記憶に深く刻まれていったのは、圧倒的なクリアさをもってすべての議論に自ら切り込んでいらっしゃったスマートな先生のお姿です。

私が大阪府立大学の大学院修士課程に入学した 1992 年には、山口先生はケンブリッジにご滞在で、一年間先生が御不在のまま過ごしたのでした。学部のうちから初期ギリシアの宇宙論に関心があり、山口先生のご指導をと待ち望んでいたのですが、それがすぐにはかなわないことが残念で、ケンブリッジまでお手紙でご挨拶をしたことを覚えています（そして山口先生が御退職の今年、今度は私がケンブリッジで一年滞在することになったのも何かの巡り合わせでしょうか）。修士課程一年目は、山野先生や金子先生や中村先生、川村先生にしっかりとご指導いただきながら過ごし、二年目の山口先生がご帰国後の年は、ギリシア語演習

や論文指導の充実感を噛み締めて、「くらくら」しながら必死でもがいた一年間でした。プラトンが『国家』の洞窟の比喩で語ったように、暗い洞窟の壁を見つめていた囚人が急に振り向くことの必要性を教えられたとき、常なる高みから照らし出されたような、ちかちか目がくらんだような体験です。

卒業論文以来のテーマであったヘラクレイトスの宇宙論を学ぶには、初期ギリシアからヘレニズム期のストア派まで、しっかり流れを踏まえなければならない、その思いでいた当時、先生による哲学史の講義が本当に刺激的で、一字一句聞き逃さないようにと受講していました。また、プラトン『メノン』や『テアイテトス』講読の授業に必死で取り組んだ記憶があります。そのころ拝読したイデア論の内在と超越についての先生の御論文、またデモクリトスとアリストテレスについての御論文、ストア派宇宙論の御論文、どのご研究にも大変感銘を受けました。いつも漠然としか理解できていなかったテキストが、そこで何が問われるべき問題なのか、しっかりと光を照らしてくださっていた気がします。

都会的なビルが建ち上る企業めいた大学が増える中、大阪府立大学の古墳近くの広い敷地に佇む学舎にて、和やかな風通しの良い学風の中で学べたことが心地よかったのも、もちろんありますが、本格的な研究に触れる出発点として山口先生の少人数の演習を受講できたことはなによりも貴重なことでした。時折登場する先生の「だじゃれ」もさわやかなアクセントになり、時には海外に御滞在なさっていた頃のお写真を拝見できたこともよい思い出です。

山口先生のスマートさと対照的に無骨な仕方でしか進めない私は、これもプラトンの比喩を借りれば、天上に駆け上がる御者であるロギスティコン（理性的魂）の先生にとって、言うことを聞かない悪しき馬（欲望的部分）のようだったかもしれません。それでもギリシア哲学を学ぶ喜びを胸いっぱいに感じながら、これ以上ないほどの恵まれた一年間を過ごしたなと振り返って感じております。

大阪府立大学の在学生として先生にご指導を受けたのは、短い一年間のみでしたが、その後、京都に移ってからの 20 年以上にわたり、変わらずご指導いただいたことに心から感謝申し上げます。京都ではプラトン『ポリティコス』という難解なテキスト読むために、夏休みに二人の弟子のために時間を割いてくださったり、ストア派のアルニムの資料を読み込む機会を与えてくださったり、学会発表でも貴重なアドバイスをいただいたことが幾度もあります。このようなかたちで長くご指導が受けられたことは私の研究人生において、何よりも貴重な財産となっております。非常に恵まれた学生だったと、いつかご恩をお返ししなければと感じています。在学中に、お礼の言葉を先生に申し上げたとき、「ご恩返しは研究成果で」と笑いながらおっしゃっていたのを覚えています。まだ思うように前に進めない駄馬ながらも、いつかご恩返しできるようになるまで、研究に一生精進して参ります。今一度言葉に尽くせぬ感謝の気持ちを

込めて、このたびは先生の御退職をお祝い申し上げます。

山口先生の退職にあたり、感謝の言葉

1997 年博士課程修了　**織　田　紳　也**

はたして退職がおめでたいのかどうかについてはいろいろと意見がありますが、いまの日本では定年まで務めることは悦ばしいことのようですので、まずは、「山口先生、ご退職おめでとうございます」と祝福の言葉をお贈りいたします。これまで本当にありがとうございました。退職後もよろしくお願いいたします。

山口先生にはこれまでたくさんお世話になりました。在学中はギリシア語の初歩の講義にはじまり、プラトンの講読、そして卒論の指導など、学業上のご指導を。卒業後も教え子たちの集まりなどにご参加いただいた際、人生の先輩としてさまざまなご助言をいただいております。なかでも、先生のケンブリッジ大学留学中に先生の留学先のご自宅に長期間滞在させていただいたこと、心より感謝いたしております。

私にとってははじめての海外で右も左もよくわからないまま、のんきにも、もうひとりの恩師に言われるままに、合計 2 週間にもおよんで寝食を共にさせていただきました。ただただ感謝の念しかありません。年齢を重ねるとともに、このことのありがたさが身にしみるとともに、当時の自分の脳天気さに赤面する思いです。

しかしこの滞在は私にとってたいへん貴重な時間となりました。文系の学問、特に哲学は全人格的な仕事です。そういう意味でも、哲学者の家庭での姿、特に三人のお子さんに接するお父さんとしての姿を垣間見られて、とても興味深く、とても参考になる時間を過ごせたからです。

ところで、先生は学者なら当然のこととして言葉の使用に関して厳格な方で、大学での講義、講読の際にも、言葉の選択についてきびしく指導いただいておりました。イギリスでの滞在中も、何度かふたりきりでお酒を酌み交わしていたときに、私の話のいたらない点や誤りをご指摘、ご指導いただき、たいへん勉強になりました。

特に印象深く私の記憶に残っているエピソードは、「（哲学的に）正義はあるかどうか」という先生からの質問に関してのものです。当時の私の学問的興味は、知識がどう成り立っているのか、人がものを知るということはどういうことなのかという問題にばかり向かっていて、いわゆる倫理的な問題に対しては相対主義的な見解をとる傾向がありました。正義という言

葉をさまざまな人が用いているが、それらは内容においてだけではなく形式的にも相容れないものが多々あり、万人が受けいれられる、あるいは受け入れるべき絶対的な正義というものがあるということに非常に懐疑的でした。しかし一方で、そのような絶対的な正義などはないという確信ももてないでいました。そのため、先生からのこの問いに対して、「正義というものをつきつめて考えてゆくと白紙になってしまう」という返答をしてしまいました。

すると、先生からは「白紙とはどういう意味?」との問いかけ。私としては、いろいろと考えをつらつらと重ねていっても行きづまって答えがでず、ギリシア語のエポケーと同じニュアンスで、そこまで考えてきたものが白紙になってしまうという意味で、白紙という言葉を用いた旨をお伝えしたところ、先生からは、「(あなたの) 言いたいことはわかるが、日本語には〈頭が真っ白になる〉という表現があり、一方で〈白紙に戻す〉という表現もある、それらを混同する表現は気をつけた方がよい」と注意をいただきました。

その注意には、研究者として、特に文献を扱う研究者として、言葉の通常の使用方法を簡単にかえてはならない、という戒めが含まれていました。その戒めをいつも守れているとは言えませんが、いまでも、可能な限り、言葉の使用を誤らないよう努めて配慮しています。それでも、つい勢いに任せて、おかしな言葉を使用してしまうと、山口先生の顔が浮かび、自己反省しています。

このエピソードについては別の反省もあります。言葉遣いの問題に話がそれてしまったため、山口先生が正義についてどのように考えておられるのかをうかがう機会を逸してしまったということです。先にもふれましたが、当時の私は認識論や言語の成り立ちということにばかり興味がありましたので、この問題を先生にうかがう機会を逃したことを、会話の流れ上、仕方がないかとあまり気にしておりませんでした。しかし、社会に出てから年ごとにこの大きな逸失利益が気になっています。できましたら、この件につき、あらためてお話しをお聞かせいただけましたら幸甚に存じます。よろしくお願いいたします。

山口先生とプロティノス

2011 年博士課程修了　**伊　藤　春　美**

山口先生との出会いをお話しするためには、少々長くなりますが私自身のことを語らなければなりません。私は地元九州で、普通の公務員として長らく働いておりました。夫も同じ職場で働いておりましたが、癌を患い 46 歳で他界しました。およそ 5 年間にわたる夫の闘病と他

界の経験は、筆舌に尽くし難いものがあり、深い喪失感と精神の病が私を襲っておりました。今まで「ある」と思っていた、この当たり前の世界が崩れていき、世界が全く別の色に見えてきたのです。

存在論的問題に直面した私は、職を辞し、地元の国立大学の大学院へ進学しました。この問題に取りつかれると、中途半端な処方箋や、近年はやりの癒し系など全く役にたたないのです。

そこで出会ったのが、プロティノスという、3 世紀のローマで活躍した哲学者でした。彼は、プラトン、アリストテレスらの思想を統合、展開させ、後の西洋思想に大きな影響を与えた思想家で、新プラトン主義の祖と言われる人物です。彼の、根源的一者から光が溢れ出てくるかのように、この世界の諸相を語る壮大な形而上学は、私の問いに見事な答えを与えていました。彼の著書を読み終えたとき、まさに「光に打たれた」という感がありました。幸い学生時代にギリシア語を履修していましたので、彼の思想を修士論文で取り上げることも不可能ではありませんでした。

山口先生は、西洋古代哲学全般に精通しておられるのはもちろんのこと、日本におけるプロティノス研究の第一人者でいらっしゃいます。私が修士論文を書いていた当時、先生は新プラトン主義協会の会長をされていて、学会があるというので大阪府立大学まで出かけていきました。そこで緊張している私を、先生は笑顔で迎えてくださいました。「徳のある人とは、こういう人のことを言うのだろうか」というのが、先生と出会った時の私の印象です。学会の雰囲気もとても明るく友好的で、忘れがたい思い出となりました。

私はプロティノスの幸福論を修士論文のテーマに選び、さらに博士課程で研究したいと希望しました。ところが、おそらく全国的に現在の大学が置かれている状況だと思いますが、現代の課題に即応できるようなテーマでなければ進学はできないと言われました。なぜプロティノスが「現代的でない」のかよくわかりませんが、プロティノスを指導できる先生がおられないということもあったと思います。私はテーマの変更を余儀なくされました。

そうはいっても、そう簡単にプロティノスを断念することはできず、ついに山口先生の研究室に出かけて行ってご相談し、私の修士論文も読んでいただきました。先生は実に適切に、私の論文の誤っている部分を指摘され、最後に、「プロティノスがあなたを呼んでいたのでしょう」と言われました。そこで私の進むべき道は決まりました。

こうして私は、人間社会学研究科の博士後期課程に進学し、九州と大阪を往復しながら山口先生のもとで学ぶことになりました。プロティノスに出会ったことが、先生のもとで学ぶ契機となったのですから、プロティノスに感謝しなければなりません。

大阪府立大学に進学してまず感じたことは、先生がたが権威主義的ではなく、自由な研究

を許容する雰囲気があるということでした。人間社会学部の当時のキャッチコピー、「みんなと違ってても いいんじゃない！」が、私はとても気に入っていました。戦国時代の堺の商人の反骨精神を彷彿とさせ、中央官庁にすり寄らないところが、さすがに大阪は違うなあとうれしくなったものです。実際、ユニークな研究をされている先生がたが多くおられると思いました。

残念なことにその後の改革で、大阪府立大学の学部の文系分野は事実上の解体となりました。九州に住んでいるものとして、大阪府民は、これほどかけがえのない財産が失われようとしていることに気づいているのだろうかと思いました。

学位論文を書き上げるまでの 6 年間、まだ基礎力も十分ではない私を、先生は忍耐強く懇切丁寧に指導してくださいました。はじめの 4 年間くらいは、プロティノスや関連する哲学者のギリシア語テクストの徹底解読に費やしました。普段とても温厚な先生も、学問的態度は非常に厳しく、原典に当たって初めてわかる思想の神髄に触れさせていただき、それは私の人生においてこの上なく実り豊かな時間でした。

山口先生の研究室に伺うと、なぜかいつも爽やかな空気を感じ、驚くことに、厳冬でも先生は半袖のシャツを着ておられ、一方夏場は長袖のシャツやジャケットを着て涼しい顔をしておられました。暑さ寒さに弱い軟弱な私からみますと、同じ部屋にいながら、先生と私とでは季節が反転しているようで、まるでストア派の賢者かプロティノスをみるような思いでした。学部の授業を聴講させていただいた折は、先生がメモなど一切見ないで、流暢にお話しされているのにも驚いたものです。

私も学会では、何度か研究発表をさせていただきましたが、他の研究者の方からよく言われましたのは、「山口先生のお弟子さんなら間違いないですね」ということです。実際には私の発表内容は心許無い限りなのですが、先生がいかに他の研究者の方たちから、一目置かれ尊敬されているのかがよくわかります。私もそんな時は、先生の教え子であることをとても誇らしく感じました。

このように述べてきますと、山口先生は真面目一方な方だと思われるかもしれません。ですが学会の懇親会に先生と参加し、二次会まで行きますと、先生のとても愉快な側面にも接することができます。いわゆる（駄）洒落を連発されるのです。その場は大賑わいで、それを聞きたいがために、二次会についてこられる方もおられます。ただギリシア語を駆使した高度なものになりますと、なかなかついていけないこともあるのですが。また先生は、大変な音楽愛好家で、きっと音楽を通じて、ピュタゴラス的な宇宙のハルモニアに耳を傾けておられるのだろうと思います。

山口先生のもとで学んだ日々の素晴らしい思い出は、とても語りつくせるものではありません。先生からいただきました学恩は、山よりも高く海よりも深いです。強い克己心、寛大さ、

思いやり、そして深い学識と知性を備えておられる先生を、いつも心より尊敬申し上げておりました。プロティノスも、知性的な徳のみならず実践においても大変優れた人物で、多くの弟子たちに慕われていたと伝えられています。自身の研究内容と自分の生き方とを一致させることは並のことではないと思いますが、先生はまさにそのような方だと思います。

これまでは、ご研究以外のことでご心労が大きかったことかと存じますが、これからはますますご研究に専念され、学界とくにプロティノス研究の分野において、一層大きくご貢献なさることと期待しております。私も、来年度から、地元の大学で教えることになりました。はなはだ不肖の弟子ではありますが、先生が授けてくださいました貴重な教えを、少しでも多くの学生さんたちに伝えていきたいと思っております。

山口先生の思い出

2013年博士課程修了　**白　雲　飛**

大阪府大に来たばかりで、日本語を満足に話せず、書けなかった頃、指導教官の大形先生がいろいろな先生方の授業を受けるように勧めてくださいました。そこで、「山口先生の授業を受けたい」と申し上げたら、偶然にも山口先生が大形先生の研究室にご用事でいらっしゃったので、大形先生に紹介して頂き、それから先生の授業を受けるようになりました。その授業で、山口先生はたましいについてのアリストテレスの考えを説明してくださいましたが、その時は、まだよくわからないでいました。その後、中国における魂魄観を研究テーマにした時、その時教わったことがようやく少しわかったように思います。

それから、先生の授業を受けるのが好きになりました。先生の授業は、余分なことを一切触れず、物事に集中ができ、とても気持ちのよいものでした。先生は外国人にとって難しい「て、に、を、は」の間違いだけではなく、より一層踏み込んで、物事の分析方法も教えてくださいました。先生の授業は、いつも緊張感溢れていて、論理的に答えられるかどうか、日々の課題でした。先生の授業の醍醐味はすべてそこにありました。それ故、講演をなさった時でも、先生が発表されているすべてを学ぼうといたしました。そのおかげで、私が発表する立場になった時、大いに力になりました。もっとも、先生は先生ご自身だけでわたしを指導しようとはなさいませんでした。何か質問を持って先生のところへ参りますと、暦のことは斎藤先生が詳しいでしょうとか、文学は大平先生でしょうとか、道教については大形先生しか分からないでしょうとか、このことは中村先生と相談してください、などなど、先生はみんなで

わたしを指導するように仕向けてくださいました。

先生にとても感謝の気持ちを覚えたことがあります。それは、形の文化会第57回東京フォーラムで発表した時のことでした。大形先生が確か海外にご出張中でしたので、先生のご指導なしで発表するしかなかったのです。わたしの訛りがある日本語での発表では誰も分からないだろうと思ったのですが、当時の会長の金子先生に大変方向性があるアドバイスをして頂きました。そして山口先生が、わたしが研究している問題を分かりやすく周りの先生方に説明してくださったのです。そのお陰で、休憩時間や懇親会の時、周りの先生方から自分の研究にとてもプラスになる情報とアドバイスを頂きました。これをきっかけに、とても大胆になり、ひとりでもどんどん発表ができるようになったのです。そして緊張しても、その場で多くの情報を取ろうとし、批判も受けいれられるようになりました。

学問以外のところでも、先生に学ぶことが多くありました。学会の懇親会の時でした。わたしは普段大変ご迷惑をかけていると思い、こういう時にこそビールでも注げたらと、わたしの故郷のやり方で注ぎました。先生は不思議な顔をなさっていたようですが、みんなの前では何も言われませんでした。家に帰って、飲みものに関して詳しい夫にたずねると、日本人は泡立つビールを飲むのが普通だと言いました。わたしの知っているやり方では、「杯壁下流」と言って、泡を立てずに酒が多い方が良いと考えるのです。何も分からないわたしを大勢の前で笑いものにしない、その配慮に今でも感謝しております。

先生が暖かい心の持ち主であることを感じとったことが、もう一つあります。『形の文化研究』に投稿する前後の学会の懇親会の時のことでした。偶然にも元会長の金子先生と山口先生の間に座りなさいと言われ、緊張のあまり、汗が止まらなくなりました。山口先生はわたしの狼狽をご覧になり、席を少しずらして、わたしの緊張している気持ちを沈めてくださいました。何も言わずに人を助ける先生のその姿にわたしはただただ感謝したのでした。

先生はいつもどこでも生き生きとした姿で教えていらっしゃいます。常に物事を客観的、歴史的、科学的に分析するように指導されます。論文を書く時は、必ず正確に、論理的に人を納得させるように努めなさいとおっしゃいます。そして、学生たちに学問を教えるだけでなく、自らの人間性で学生たちを感化させ、より良い道を歩むように成長させてくださいます。わたしも少しでも先生をみならっていけたらと思います。